

VIVID STAND PROUD

反町龍騎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ミットチルダ中央区の高校に通う学生、空条承太郎。彼はインターミドルの選手である。そんな彼には、他には無い不思議な力を持っている。それはスタンド。その力は他の人には見えない。見えるのは、同じ力を持つ者だけ。だから承太郎は、ある誓いを立てた。

『使わずの誓い』を。

# 目次

裁くのは、俺のスタンドだアツ！

1



裁くのは、俺のスタンドだアツ！

ある日の夜の事である。学生帽を被り、黒い学生服を着た筋肉質で長身の男が、一人の女性に声を掛けられた。その女性の外見は十八程で、バイザーをかけている。そしてエメラルドグリーンの長い髪が印象的だった。

「失礼します。空条承太郎さんとお見受けします。貴方にいくつか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事が」

女性にそう言われた男性、——空条承太郎は、己の鋭い瞳を女性へと向ける。そしてふんつ、と鼻を鳴らすと、

「質問をするのなら、バイザーを外して名を名乗りな」

「失礼しました」

言つて女性はかけていたバイザーを外す。その瞳は青と紫の虹彩異色だ。

「カイザーアーツ正統、ハイデイ・E・S・イングヴァルト。『霸王』を名乗らせて頂いています」

「——霸王」

女性の名前を聞き、承太郎の記憶から一つの答えが導き出される。

「なるほど。テメエが噂の通り魔ってやつか」

「否定はしません」

女性の返答に鼻を鳴らし、女性へ質問する。

「伺いたい事ってのはなんだ」

「伺いたいのは、貴方の知己である『王』達についてです。聖王オリヴィエの複製体と冥府の炎王イクスヴェリア。貴方はその両方の所在を知っていると???'」

「??'知らねえな」

ズボンのポケットに手を入れ、堂々とした姿で女性にNOを突きつける承太郎。承太郎は更に言葉を続ける。

「聖王のクローンだの、冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えなんざねえ。人違いじゃあねえのか」

「そんな事はありません」

「少なくとも俺は、そんな奴等と知り合いになった覚えなんざねえよ」

「——分かりました。その件については他を当たるとしましょう」

承太郎から視線を逸らし、何事かを思った女性は、承太郎の方へ視線を戻す。

「ではもう一つ確かめたい事は、貴方の拳と私の拳、いったいどちらが強いのか、です」  
「??'やめときな、俺は拳で戦うのはリングの上って決めてるんだ。——俺とやりたいな

ら、リングに上がってきな」

「??遠慮しておきます。私の確かめたい強さとは、——生きる意味とは、表舞台には無いんです」

そう言い、左手を前に出し構える女性。その女性に溜息を吐き、承太郎は女性を指差す。

「ならテメエにチャンスをやろう。今から俺のやる事が見えたのなら、俺はテメエと戦ってやるよ」

「??いいでしょう」

試されている。そう思った女性は、承太郎に全神経を集中させる。いつ動いてもいい様に、承太郎の一挙手一投足に目を光らせる。

「——ッ!」

だというのに、女性は殴られてしまった。承太郎は一切動いていない。一歩どころか、ピクリとも動いていない。だというのに殴られた。これは一体どういう事なのだろうか。

「——そうか、見えなかったか。ならテメエは、リングの外で俺と戦う資格は無いって事だ」

そう言って承太郎は女性に背を向け歩き出す。

「——ッ！待ってください！」

女性が承太郎の背中に静止の声を掛ける。

「今、貴方は一体、何をしたというのですか？」

女性の問いに、承太郎はふんと鼻を鳴らし、こう答える。

「答える必要は無いね」

承太郎は女性に背を向け歩き出す。その背中に、戦意は全くなく。

「卑怯ではありませんが、貴方と戦うためには、こうする他ありませんね」

僅かながらの殺気を感じ、承太郎は振り返る。すると目の前には先程の女性が。女性の右拳が承太郎の顔面目掛けて放たれる。承太郎はそれをギリギリのところまで回避し、その場を飛び退く。

「?? テメエ、背後からの不意打ちとは、いい度胸じゃあねえか」

「私もしたくはないのです。ですが、貴方と戦うためには、こうする他ない様でしたので」

女性の言葉に溜息を吐き、承太郎も構える。

「いいぜ。かかってきな、霸王」

「防護服と武装をお願いします」

「もうしているぜ」



「??していない筈ですが」

「霸王。これは、テメエと戦うのに防護服も武装も必要ないって言っているんだぜ」

「??そうですか」

咄くと、女性はまたも構える。女性の行動に疑問を覚える承太郎。

(この距離で構えた。空戦か、それとも射砲撃か)

「——ッ！」

気が付いたら、女性は承太郎の目の前にいた。またも女性の右拳が承太郎の顔面を狙う。間一髪それを避ける承太郎。

(突撃！)

女性は間髪入れずに承太郎の方へと突進する。

(速い！)

この時承太郎は、少し女性に対して違和感を感じた。

(違う！これはコイツが速いんじゃない！歩法だ！歩法によって、俺が認識出来ないようにしている！)

女性の右拳が、承太郎の腹部を狙う。それを承太郎は、膝で受け止める。

「オラッ！」

承太郎が反撃とばかりに左拳で殴りかかるが、女性は首を回転させて威力を殺す。

承太郎は女性の攻撃が来る前に、その場を飛び退く。

「列強の王達を全て倒し、ベルカの天地に覇を成すこと。——それが私の成すべき事です」

自分の胸に手を当て語る女性。その女性に怒りを感じた承太郎は、帽子の鏢を指でなぞる。そして女性を指差す。

「このクソアマツ！寝惚けた事抜かしてんじやあねえぜツ！昔の王様なんざ、とうの昔に全員死んでいゝ！生き残りや末裔達も、皆普通に生きていゝ！」

「弱い王なら、この手でただ、屠るまで」

承太郎の激昂に、女性は淡々と無慈悲に告げる。その言葉が腹に据えかねた承太郎は、一度深呼吸をする。そして静かに、だがはつきりと呟く。

「たった一度だ。たったの一度だけ、俺自身が決めた誓いを破るぜ??ッ！」

すうつと息を吸い、承太郎は叫ぶ。

「スター・プラチナ！」

女性は、承太郎の後ろに何かの気配を感じる。だが感じるだけで、何かまでは分からない。

「ベルカの戦乱も聖王戦争も、もうとづくに終わってるんだよ！」

三度承太郎に、肉薄する女性は言う。

「終わってないんです。私にとってはまだ何も」

女性 は 右腕 を 振り 上げ、 承太郎 に 向か っ て 思い 切り 振り 下ろ す。

「霸王、断空拳」

それで終わったかに見えた。承太郎が普通の人間であれば、受け止められまい。受け止めたところで、ガードの上から深手を追う。それ程の打撃。——そう、承太郎が、普通の人間であれば、だ。

「——ッ！」

女性の手刀が、空中で停止している。女性が止めた訳では無い。勿論止めたのは承太郎だ。だが承太郎は動いていない。ズボンのポケットに手を入れたまま、仁王立ちしているだけだ。

なら何故女性の手刀が止められたのか。



と眩き、デバイス进行操作する。

『もしもし承太郎君? どうしたの?』

画面に映ったのは、藍色の短髪と翠の瞳をした女性。承太郎が通信した先は、管理局  
港湾警備隊防災課特別救助隊セカンドチームに所属する防災士長であり、ソードフィッ  
シュ隊の分隊長を務める、スバル・ナカジマである。

「ちよいとケンカをしてな」

『え!?! ケンカ!?!』

「ああ、先に手を出したのはこっちだし、このまま放っておくのはちと気分が悪いんで  
な。アンタの家に運んでもいいかい?」

『ああ、うん、いいよ』

承太郎に対し、笑顔で答えるスバル。

「ありがとうよ。じゃあ今から向かうとするわ」

『うん。待ってるね』

通信を切つて承太郎は、少女を担ぐ。

「やれやれ。コイツの荷物は、——まあ、コイツが起きた後で構わんか」